



文化財愛護
シンボルマーク

鳥取県八頭郡郡家町
天寺遺跡発掘調査報告書

1983.3

郡家町教育委員会

序 文

天寺遺跡発堀調査は、昭和58年度実施予定の県営八頭中央地区ほ場整備事業に伴うもので、ほ場整備事業の円滑な進捗を図るため、緊急に遺跡の確認のため、試堀調査を実施したものであります。

この天寺遺跡は、土師百井廃寺跡から東側に500m離れ、靈石山系の山裾にあります。この付近の水田から瓦片等が出土し、地形的に見ても上師百井廃寺の瓦を焼いた窯跡の可能性が強く、調査を実施したものであります。窯跡らしきものは発見できず調査を中途で打ち切りました。

このたびの調査は、約300m²を昭和57年12月1日から昭和57年12月13日まで現場調査し、昭和58年2月11日から昭和58年3月3日まで調査結果のとりまとめを行ない、延べ88人役によつて実施いたしたものであります。

本調査の実施にあたり、直接調査に参画していただきました方々、また、常に適切な御指導にあたっていただきました県職員の方々、さらに、八頭中央土地改良区の方々の厚い御理解、御協力に対しまして深く感謝と敬意を表するものであります。

昭和58年3月20日

郡家町教育委員会教育長 北村一利



写1 東南上空より万代寺遺跡地と共に天寺遺跡を望む(航空写真)

調査団名簿

調査団長 北村 一利（郡家町教育委員会教育長）
調査員 山形 顯應
調査指導 鳥取県埋蔵文化財センター
事務担当 丸山 勉（郡家町教育委員会社会教育主事）
調査協力 波多野 俊爾（八頭中央土地改良区理事長）
作業員 永田 弘道 林 喜実 西尾 一祐 前田 浩司
林 利喜藏 林 致朗 井上 登 西尾 耕
井上 君子 林 昭枝

目 次

第一章	発掘調査に至る経過	3
第二章	遺跡周辺の歴史的地理的環境	3
第三章	調査の概要	6
第四章	出土遺物	9
	土器実測図	9
	出土土器写真	10
	出土瓦について	10
まとめ		12

例 言

1. この報告書は県営八頭中央地区は場整備事業に伴う郡家町教育委員会による昭和57年12月1日より同年12月13日に至る発掘調査の記録である。
2. この調査に当っては、適宜県埋蔵文化財センターの指導助言を得た。
3. 本書の執筆編集は山形顯應が担当し、写真、遺物実測、トレースは永田弘道が担当した。
4. 方位は磁北をきし、土色は農林水産技術会議事務局監修の標準土色帳によった。

第一章 発堀調査に至る経過

郡家町では、農業経営の近代化を図るために、年次ごとにほ場整備事業が実施されている。

このたび、昭和58年度に、ほ場整備事業が実施予定されている範囲内で、以前から瓦、土器片等の出土が見られ、窯跡が存在する可能性の強いことは知られていた。

このため、関係諸機関と協議を重ね、昭和56年11月頃、プロトン磁力計で調査した結果、磁気反応を示す場所のあることが確認された。

また、山裾付近に瓦、土器片等が散在していることから、試掘調査を実施することになった。

昭和57年12月1日から、磁気反応のあった場所を中心に、約300m²の試掘調査を実施したところ、反応のあった付近からは石が多数出土し、窯跡等の遺構は確認されなかった。

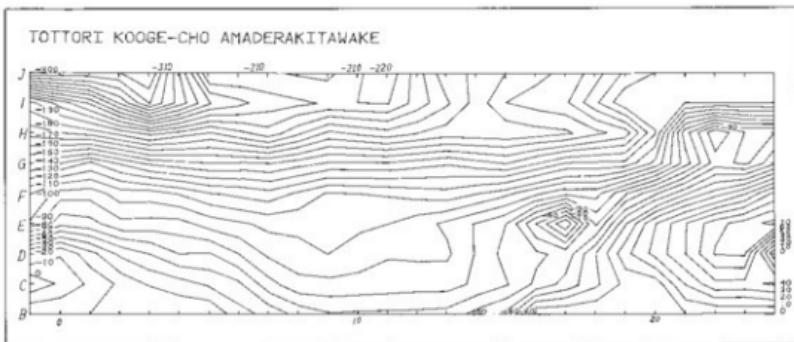


図1 奈良国立文化財研究所による磁力線検査表

第二章 遺跡周辺の歴史的地理的環境

天寺遺跡のある郡家町は鳥取県の東部に位置し、鳥取市と隣接して南側にある農山村地帯である。現在町役場の置かれている郡家には各種官庁出先機関が軒を連ねて八頭郡内における地方政治の中心地的観を呈している。昭和57年4月より同年8月に及ぶ同町万代寺地区の発堀調査によって、ほぼ奈良時代から平安初期にかけて因幡国八上郡の郡衙跡とみられる遺構が検出されて、現代ばかりでなく古代においても地方政治の中心地であったことが知られた。この現代、古代の地方政治中心地とゆう一事をみても、地方交通の要路であることが伺える、そのような農山村地帯である。

今回の調査で瓦窯跡の検出はできなかったものの、調査地北側の丘陵地帯には数多くの古墳



- 楠文時代遺物 ▽ 線 墓 ① 因幡国府跡 ⑥ 開益磨寺跡 ⑪ 郡原7分塙
 凡 ☆ 弥生時代遺物 × 窯 跡 ② 大極寺庵寺跡 ⑦ 美谷瓦窯跡 ⑫ 土師百井窯跡路
 ▲ 銅鐸出土地 △ 寺 院 跡 ③ 國分寺跡 ⑧ 寺山古墳 ⑬ 万代寺遺跡
 例 ■ 前方後円墳 ○ 円溝及び古墳群 ④ 国分尼寺跡 ⑨ 西御門遺跡 ⑭ 天守遺跡
 ○○ 円溝及び古墳群 ⑤ 笠ヶ坪原寺跡 ⑩ 西の岡及び福井古墳 ⑮ 空山古墳群

※この図面は国土地理院の許可を得て郡家町が複製した5万分の1の地図である。

図2 天寺遺跡周辺の遺跡地図

があり、現在梨園内至柿畑となっている丘陵中腹下部の所々から古代瓦の出土がみられ、奈良平安にまで溯る建築物の存在したであろうことが伺がわれた。これ等建築物のあったであろう時代の現調査地近辺を想像するに、現岡山県津山方面から志戸坂峠（鹿跡御坂）を通り智頭の道銀駅を通過する因幡国府への官道は千代川、八束川、私都川（古くは土師川）の合流点の国

中平野の何処かを通っている筈で、案外米岡附近に莫男駅が存在し、石田百井、土師百井、万代寺の私都川添いに官道はのびていたものと想像させられる。そのように考えると現調査地の私都川対岸には官道が通じていたとみていい。その官道を越して400～500m南には郡衙と郡衙に付随する建物群。調査地東方500m位に郡司の代寺と考えられる土師百井廃寺（慈住寺）があり、その近辺には郡衙に属する武器庫や穀倉があったと考えられる。これ等は小字名からの想像に過ぎないが、天守遺跡近辺は遺跡や遺構の多い所である。

万代寺遺跡からは郡衙遺構だけでなく火山噴火活動の下火となつた頃、約6千年前の中期縄文人の堀ったと思える小動物を獲えるための「落し穴」と考えられる穴20数箇。縄文後期、縄文晩期の土器片。弥生中期土塙墓20数基。同時代の土器、石器。同時代住居址とみられるもの2基。古墳期住居址8基。同時代土器類と古墳2基。周溝及び柵列をめぐらした、一町四方の遺構、一町半×一町半以上の同様官街址。建物群址等の検出。西御門遺跡からは縄文後期の土器、石匕、石斧、石鎌、石鍤等が。鳥取市の船木・古郡家で晩期縄文土器。河原町佐賀や鳥取市橋本で打製石斧が。下坂や船岡町破岩で銅鑼が。河原町今在家で弥生中期の土器が。山田や鳥取市久末で弥生後期の土器が。船岡町牧野遺跡で弥生中期から後期の土器が少々出土し。船岡町西ノ岡遺跡で後期から終末期にかける堅穴住居跡が。更に船岡町船岡の丸山遺跡では堅穴住居跡や中期、後期の土器、分銅形土製品、柱状片刃石斧、挿入石斧、石庵丁等が検出される等天寺遺跡周辺は縄文期より弥生期にかけても係わりのある地域といえる。

更に古墳期に入ると八頭郡内確認古墳の85%が河原町と郡家町に集中し、当遺跡地所在の釜石山系には船常、米岡、池田、土師百井、福本地内に横穴式石室を主体とする群集墳が散布しており、米岡2号墳、福本4号墳の如く線刻壁画も見受けられる。大きさの点からも、前述の船岡町丸山遺跡の多量の埴輪を伴う67m級を筆頭に、50mの曳田の獣古墳、渡一本、郷原、郡家、宮谷、山路等の前方後円墳等数多い古墳が当地域在住の人々との係わりを物語っている。

法起寺式伽藍配置をもつ土師百井廃寺跡、郡衙跡の検出された万代寺遺跡、堀立柱建物跡の検出された船岡町西ノ岡遺跡等の歴史時代遺構、遺物の検出地域。特に注目しなければならぬのは西ノ岡遺跡の堀立柱建物跡と同遺跡出土の円面鏡で、その地域が船岡町字郡家の近くであり、郡家と言う地名に関連し、更に万代寺遺跡の郡衙が平安期初頭頃までと考えられる点もあって平安時代中期より船岡町大字福井小字西ノ岡から字郡家にかけて郡衙が移転したのではないかろうかと考えられるからである。

河原町牛ノ戸、同町天神原、郡家町の山田、下坂、花原で須恵器の窯跡が検出されており、奥谷、下坂に瓦窯跡が検出されている。特に奥谷瓦窯跡からは土師百井廃寺跡出土の布目瓦及び鶴尾の破片が同型であるため慈住寺瓦は奥谷瓦窯で焼かれたものと見られている。土師百井廃寺出土瓦と万代寺郡衙跡出土瓦は同型であり、これも奥谷で焼かれたものと見られる。土師ノ郷、土師川、土師神社等から土師一族の里として当地域を考えるのは僻目であろうか。

第三章 調査の概要

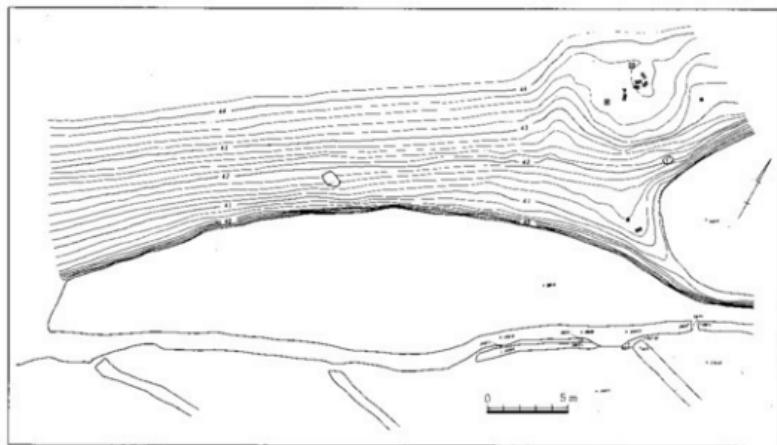


図3 調直前実測図

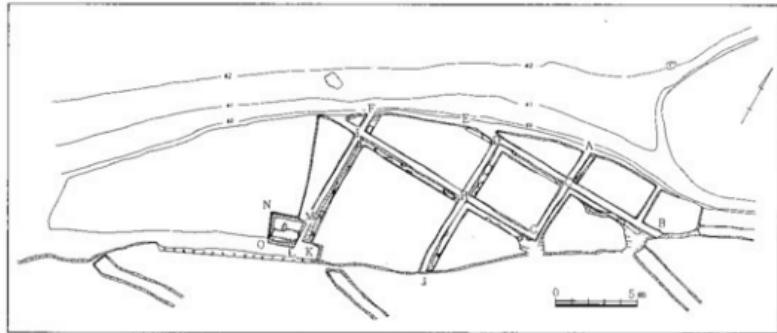


図4 調査現況図

凡 例	① 7.5 Y R 5%	褐色耕土	⑦—1 5 Y R 3%	暗赤褐色中粒砂混入埴壤土
	② 5 Y R 3%	暗赤褐色粉質耕土	⑦—2 5 Y R 5%	赤褐色中粒砂混入埴壤土
	③ 5 Y R 5%	無機色埴壤土	⑧ 5 Y R 5%	黒褐色小粒砂混入埴壤土
	④—1 7.5 Y R 5%	黒褐色中粒砂混入埴壤土	⑨ 7.5 Y R 4%	褐色大粒砂混入埴壤土と 2.5 Y 7/4 淡黄色
	④—2 7.5 Y R 5%	暗褐色中粒砂混入埴壤土		シルト壤土の面入土。
	⑤ 5 Y R 5%	褐色赤褐色土砂粉粒、極小粒砂混入埴壤土	⑩ 7.5 Y R 4%	褐色極小粒砂混入埴壤土
	⑥ 2.5 Y R 5%	暗赤褐色小粒砂混入埴壤土	⑪ 7.5 Y R 5%	黒褐色中粒砂混入埴壤土
	⑥—1 2.5 Y R 4%	暗赤褐色小粒砂混入埴壤土	⑫ 7.5 Y R 5%	黒褐色小粒砂混入埴壤土
	⑦ 5 Y R 5%	にぶい赤褐色中粒砂混入埴壤土	⑬ 5 Y R 4%	暗赤褐色小粒砂混入埴壤土
	⑦—1 5 Y R 5%	にぶい赤褐色中粒砂混入埴壤土	⑭ 5 Y R 5%	黒褐色小粒砂混入埴壤土

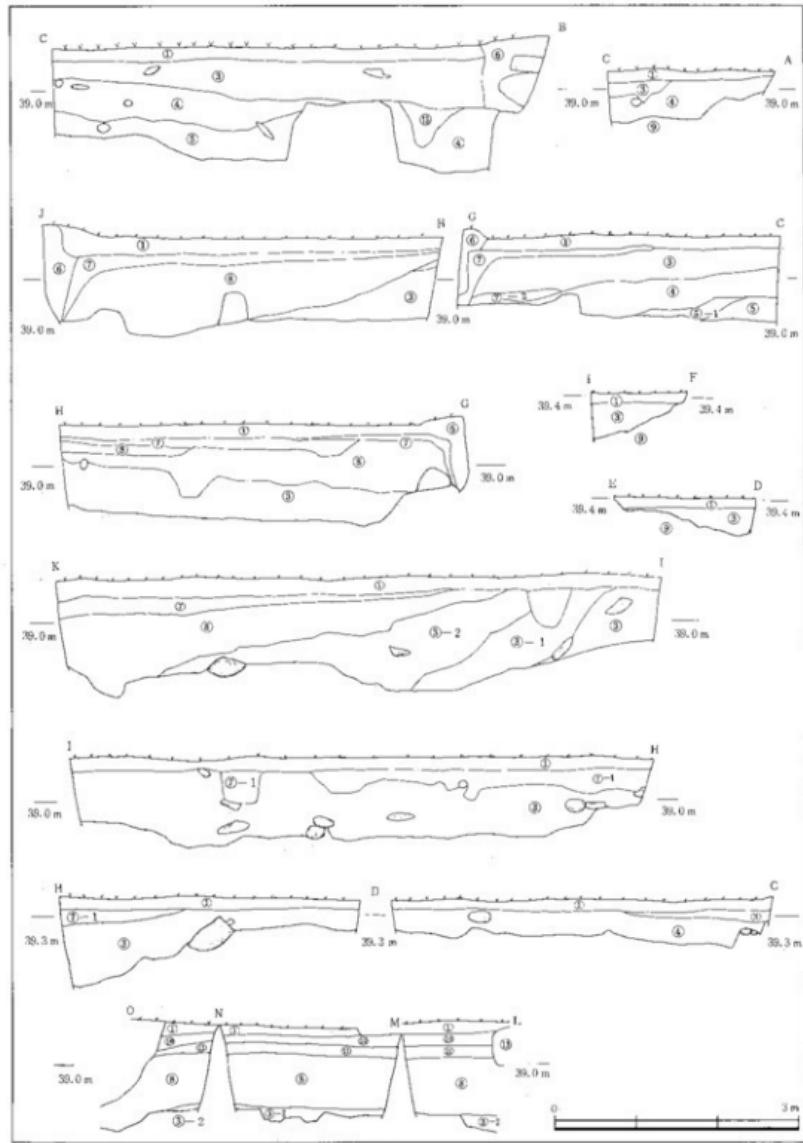
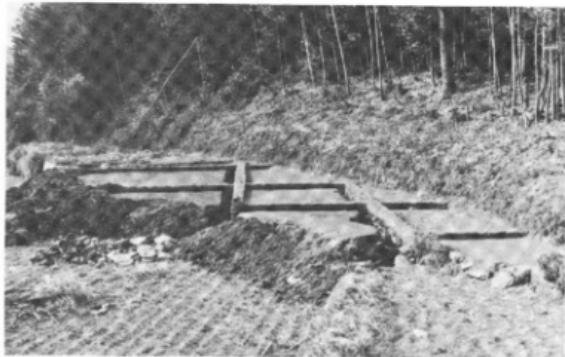


図5 トレンチ壁面図

天寺遺跡として今回調査された部分は、昭和56年度、奈良国立文化財研究所によって実施された磁力線検査の結果、瓦窯があるとすれば最も可能性のある地域と判断された部位で、調査は窯跡の存在を前提に開始された。

調査に先立ち調査対象地域外の踏査より進められた。調査地直北の台上には江戸中期以降と思われる五輪塔の空、風輪数箇の散在が見られ、その直北に直径約6mの円墳らしいもの及び墳丘上に五輪塔の空、風、火輪6基分が見られた。それより北約7m離れて果樹園への小径。その上部は柿畠、梨園と続いている。梨園中には所々古墳に使用されたと思われる石材、極くまれに石棺材と思われる石板が野積みされ、石垣に利用されていた。須恵器片1点と古代瓦片1点を採取。柿畠中の山小屋には小屋主が発見した古代瓦片が約20点繩で一まとめにされていた。踏査の結果、調査地北側の柿畠、梨園となっている丘陵緩斜面上に古墳や古代瓦で葺いた建築物の存在したであろう可能性が認められた。

調査地は磁力線検査による瓦窯所在濃厚地点を中心に磁北に合せて、十文字に約30cmのベルトを残し水田耕土を除去することとした。耕土の下層は耕地化時に地山を削平された丘陵裾接続地を除いて、客土の相を呈していた。窯跡の検出をみても破壊を最小限度に止めるようベルト脇に幅約40cmのトレントを入れる。（図4と図5のB～C参照）最も窯跡所在濃厚



写2 天寺遺跡を東より望む

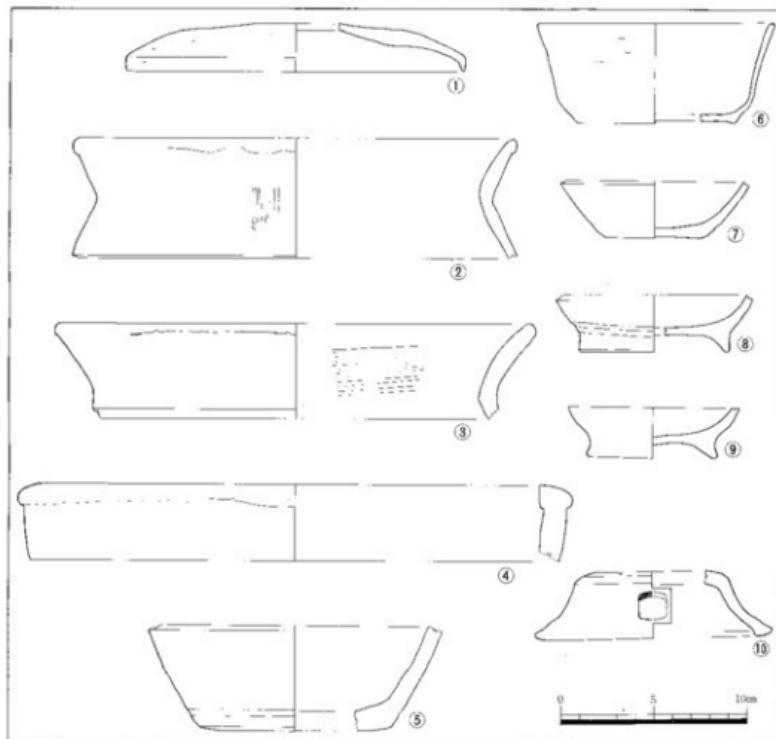


写3 トレント掘りあげ状況

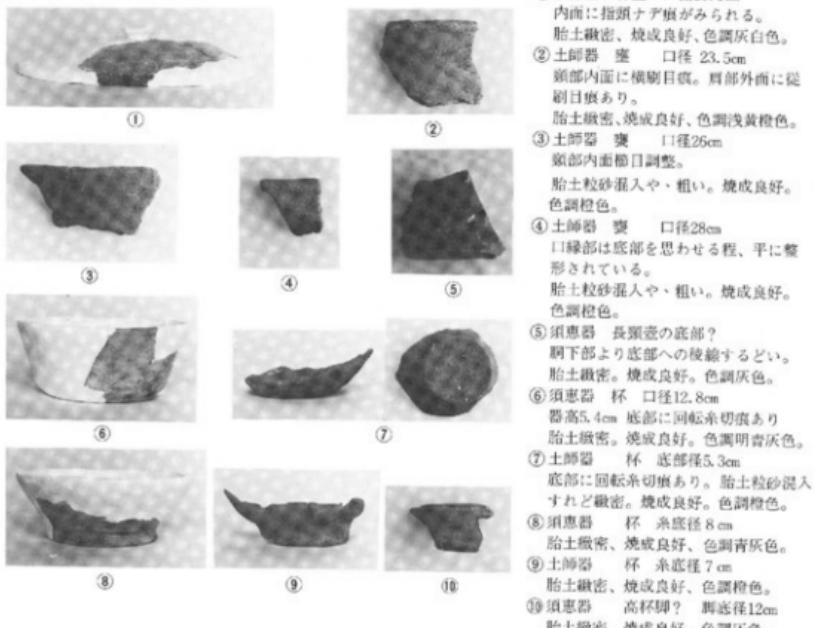
地点で、第二層、第三層に他地点で見受けられない状態が見受けられた。それは第二層で礫の混入が見られ、第三層は礫岩で層が形成されている程、礫や岩石の混入が多くかった。田地へ流入する山水も鉄分が多く含まれているらしく耕土の下及び第三層の下部に茶褐色の層がみられた。全トレンチを観察し人工的遺構は認められず、おそらく鉄分を含んだ礫岩や水に含まれた鉄分の蓄積が磁力線に変化をもたらし、図1のような磁気の乱れを発生させたものと思われた。

第四章 出 土 遺 物

第一節 土 器 実 測 図



第二節 出土土器写真

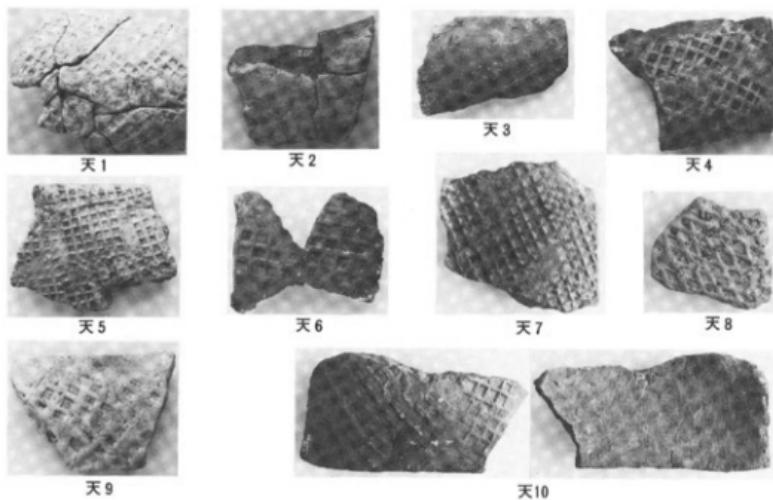


- ① 須恵器、杯蓋 口径18.1cm
内面に指頭ナデ痕がみられる。
胎土緻密、焼成良好、色調灰白色。
- ② 土師器 塗 口径 23.5cm
頸部内面に横刷目痕。肩部外面に從刷目痕あり。
胎土緻密、焼成良好、色調浅黄橙色。
- ③ 土師器 塗 口径25cm
頸部内面櫛目調整。
胎土粒砂混入や、粗い。焼成良好。
色調橙色。
- ④ 土師器 塗 口径28cm
口縁部は底部を思わせる程、平に整形されている。
胎土粒砂混入や、粗い。焼成良好。
色調橙色。
- ⑤ 須恵器 長頸壺の底部?
胴下部より底部への後退するぞい。
胎土緻密。焼成良好。色調灰色。
- ⑥ 須恵器 杯 口径12.8cm
器高5.4cm 底部に回転糸切痕あり
胎土緻密。焼成良好。色調明青灰色。
- ⑦ 土師器 杯 底部径5.3cm
底部に回転糸切痕あり。胎土粒砂混入すれど緻密。焼成良好。色調橙色。
- ⑧ 須恵器 杯 糸底径 8 cm
胎土緻密、焼成良好、色調青灰色。
- ⑨ 土師器 杯 糸底径 7 cm
胎土緻密、焼成良好、色調橙色。
- ⑩ 須恵器 高杯脚? 脚底径12cm
胎土緻密、焼成良好。色調灰色。

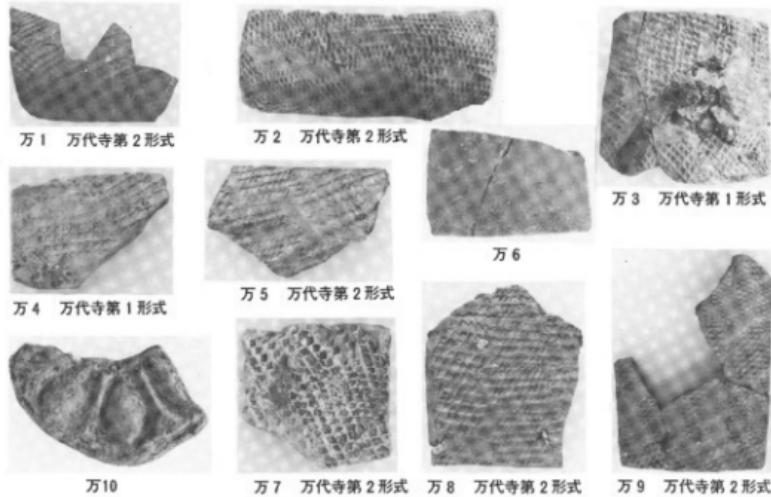
第三節 出土瓦について

瓦窓跡の出現が予想された遺跡だけに、平瓦11点、丸瓦1点の出土がみられた。灰色の硬焼もあるが灰白色の軟調が多い。胎土には直径1cmから5mmの礫片約2%、砂質約50%位含有されていた。平瓦11片中7種のスタンプが数えられ、胎土の類似から、同一地域窓生産による瓦と推測される。池田廃寺(尼寺)出土瓦は因幡国分寺のものと同じこと当遺跡小字名は天^{アマ}寺北分なので「尼寺」に関係ありと考え因幡国府遺跡発掘調査報告書(鳥取県教育委員会)を参照比較したが、同一スタンプは発見出来なかった。この遺跡出土の瓦は一枚一種のスタンプである。ついでながら土師百井廃寺跡出土瓦の少量と、万代寺遺跡出土瓦を比較したところ、上記二遺跡出土瓦は緻密で細緻な胎土を有し、万代寺出土瓦と同一種類の瓦は絶対土師百井より出土していることが判明した。万代寺出土瓦には5種類のスタンプがあり、一枚の瓦には必ず2種類のスタンプがおきれていて、組合せの上から三つの形式に分類できた。膨大な土師百井廃寺跡瓦の中から天寺遺跡瓦と同種瓦を探す努力をおしんだことがくやまれる。

天寺遺跡出土瓦



万代寺遺跡出土瓦



ま　と　め

数年前L～O（図4参照）南側が決壊し、現在のコンクリート壁に直す際、基礎部より古代瓦十数点まとまっているのが出土したとか。丁度その頃、土師百井廃寺跡周辺の踏査が県文化課によって進められていた。工事現場にある古代瓦を見付けた県文化課の依頼を受けて、鳥取県内各所一連の一環として磁気反応テストが奈良国立文化財研究所の手によって行なわれた。図1の結果がそれである。瓦の出土状況より附近に瓦窯跡の存在が考えられての調査だけに、関係者間にあっては期待と希望のこめられた反応結果であった。

昭和58年度は場整備予定地に上記天寺北分も含まれることになり、天寺遺跡と称し瓦窯跡があるものとして調査することとなった。昭和57年12月、天寺遺跡調査は当時進行中の万代寺遺跡発掘調査の整理を一時中断して同調査団スタッフを投入し実施された。結果は十数点の須恵器片、数点の土師器片、十数点の瓦片の出土が客土中よりみられただけで、何等遺構を確認するに至らなかった。

万代寺遺跡が調査され、郡衙の可能性濃厚になりつゝある現在、当天寺遺跡周辺も種々の遺構存在の可能性が増大しつゝある。調査前踏査で調査地北側の丘陵地帯下部緩斜面には建物の存在を示す古代瓦が見受けられ、尼寺廃寺跡の存在可能性すら考えられた。

天寺遺跡出土の土器類、瓦類は客土中より出土しており、少なくとも現田地の高度より高位の土地が削平され運ばれたものと考えられ、削平地は北側丘陵地帯に求められる。そこには平安期の瓦窯建築物があり生活があったのであろうと考えられ、それ等は万代寺官衙と何等かの関係を保ちつつ盛宴を共にしたのではなかろうか。

天寺遺跡近辺を見ると、古代官道は何処を通っていたのか。莫男駅は何処にあったのか。周辺には寺院関係の小字名が多いが古代寺院との関係はどうなっているのか。調査地直北の丘陵地緩斜面には建築物の存在を示す古代瓦や土器の出土が認められるが、どのような建築物が存在したのか。官衙との関連を示す小字名が散見されるが、はたして官衙関係のものなのか。これ等天寺遺跡を中心に半径五百米位の範囲をみても数多い遺跡をかゝえた位置にある調査地であった。勿論土師百井廃寺跡や万代寺遺跡等も上記範囲に入っている課題を多く抱えた地域であった。

昭和58年3月発行

天寺遺跡発堀調査報告書

発行/都家町教育委員会
鳥取県八頭郡都家町大字都家493
TEL (08587) 2-0201

印刷/松島印刷所
鳥取県八頭郡都家町都家261
TEL (08587) 2-0678